

# 2022年度 日産財団理科教育助成 成果報告書

テーマ：京都から広がる世界～6年生の私たちにできること～

学校名：京都教育大学附属京都小中学校

代表者：湯川 夏子

報告者：森脇 正博

全教員数： 62名

全学級数・児童生徒数： 36 学級・871名

実践研究を行う教員数： 5名

実践研究を受けた学級数・児童生徒数： 3学級・100名

※ご異動等で現職の方では成果発表が難しい場合、上記代表者または報告者による代理発表を可といたします

## 1. 実践の目的（テーマ設定の背景を含む）

予測不可能な様々な課題が散漫する社会の中、子どもたちには「新しい時代を生き抜く力」が求められている。それは、豊富な知識や技能に支えられた力だけを求めているのではない。目の前に与えられた問題が、自分の持ち得ている知識や技能だけでは解決できなかった時にこそ、自らの力を発揮できる姿を求めている。「予測不可能な様々な課題」とは、都合よく自分の持ち得ている知識や技能に沿ったものであるはずがない。もしかすると、豊富な知識や技能に支えられた力しか持っていない子は、そのような課題に出会った時、自分の知らない課題であるためその解決の糸口を探る事すら困難になってしまうのではないだろうか。つまり、知っていることには堂々と自信をもって対応をすることができるが、未知の問いに直面した時に自らの力をどのように発揮すればいいのかが分からなくなるのである。

それゆえに、学び方を身に付けていき、自分が持ち得ている知識と技能をどのように活用すればいいのかを考える力を持ち、実際に行動にうつす姿を育てていくという視点が大切である。そのような「学びの素地」があれば、課題解決のために必要な新たな知識や技能を獲得しようとし、課題解決に向けて何度も粘り強く創造的に自らの考えを創り出そうとするであろう。そして、さらに新たな「問い」を自ら見出しながら広く深く学びを進めていく姿につながっていくと考える。

総合的な学習の時間は、まさに「新しい時代を生き抜く力」を実の場で体現しながら、各教科で得た学び方（「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「何ができるようになるのか」）を活用していくことができる時間である。

そこで、6年生では、本校の全体計画に定めた探究課題「京都から広がる世界」を踏まえて、SDGsを視点を単元に構築した。

## 2. 実践にあたっての準備（機器・材料の購入、協力機関等との打合せを含む）

- 研究協力者・アドバイザーとの意見交換（出張・招聘）
- SDGs関連の書籍購入
- 生徒発表に向けての機器購入（HDMIケーブル等）
- 生徒の資料用保管ファイル購入
- 生徒発表時の撮影・編集（外注）
- 研究テーマに沿った実験道具や備品の購入（画用紙・工具・木工用ボンド等）

### 3. 実践の内容

1 単元構想（コロナ感染状況の推移を踏まえ、2022年度前期は教室での活動を中心に、そして後期より徐々に外部での学びの場を設定する構想となっている）

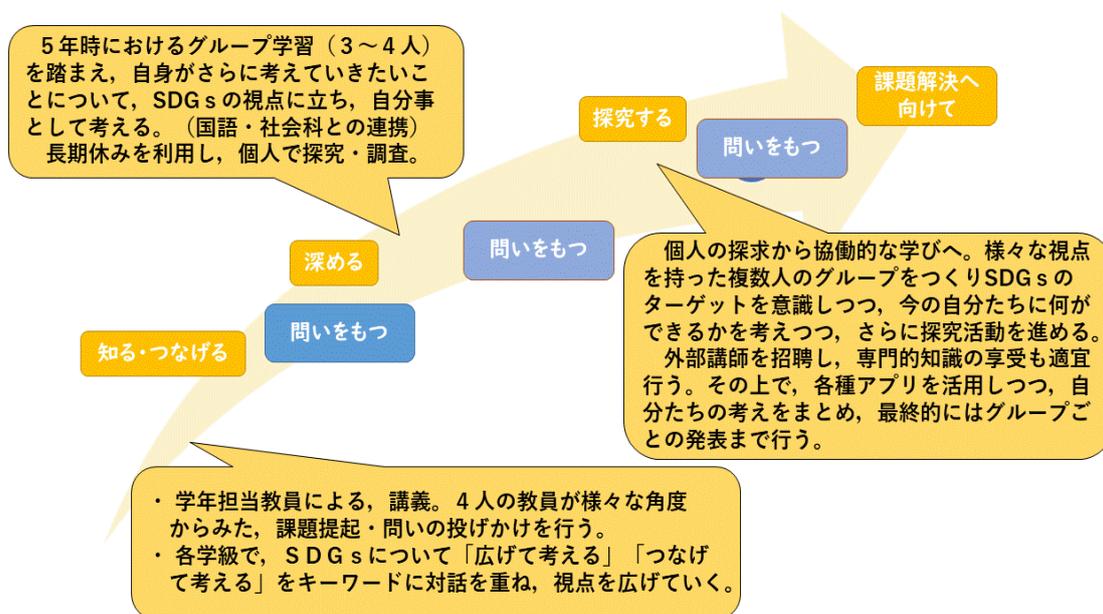


図1 1年間の学びのスケジュール

#### 2 育みたい資質・能力

- ①学習課題に関する概念的知識を獲得し、よりよい課題解決のために必要な知識や技能を身に付け、探究的な学習のよさを理解している。
  - ・課題に対して、興味関心を持ち、その解決に必要な知識や技能を身に付ける。
  - ・課題解決に向け、見通しを持った探究活動を計画し、情報を収集する。
  - ・教員からの講義や問いかけ、書籍からの学びを踏まえ、探究活動の有効性を理解する。
  
- ②実社会や生活の中から問いを見出し、探究的な見方や考え方をを用いて、自分たちで課題を設定し、情報収集した上で、整理・まとめ・発表とつなげる。
  - ・自分たちが住む京都の町並み・環境の現状認識から、問いを見出す。
  - ・その問いの解決に必要な材料、分析方法等の流れを論理的に構築する。
  - ・主体的に情報や資料を収集し、それらの情報を適切に取捨選択し、活用する。
  - ・伝えたいことや学びからの発見点を整理し、まとめ、論理的に表現する。
  
- ③実社会や生活の中から、積極的に問いを見出し、主体的・協働的に課題の解決に取り組み、学習したことを自己の生き方に活かし、新たな課題が生じて、これまでの学びを活かし、積極的に取り組もうとする。
  - ・異なる意見や他者の考えを受容し尊重する中で、交流を深め、豊かな人間関係を築く。
  - ・グループ内のメンバーと協力して、ねばり強く、積極的に課題を探究する。
  - ・社会の一員・自分事として、自分には何ができるか、何をすべきかを考える。

## 4. 実践の成果と成果の測定方法

具体的実践の流れ

### ① 知る・つなげる (①～⑥時間目)

- (1) 学年オリエンテーションを行う。
- (2) 学年担当教員による、様々な角度からの問題提起や問いの投げかけを行い、方向性を確認する。
- (3) 学級ごとに、SDGsから見た京都の現状をテーマに、「広げて考える」「つなげて考える」をキーワードに対話を重ね、視点を拡張(拡散)する。

### ② 深める (⑦～⑩時間目)

- (1) 5年時の学習「京都再発見」を基礎資料として、SDGsの視点から、さらに探究してきたい内容について、書籍や電子データ、他者の語りから考えていく。
- (2) 長期休みを利用し、前期前半の学びを、より自分事として、調査・探究活動を行う。(図2)
- (3) 外部講師を招聘し、最新の専門的知見を享受したり、正しいデータの見方や処理の仕方についても学びあう。
- (4) クラスごとに、各々が興味を持って探究している内容を、発表する(中間プレゼンテーション)。

### ③ 探究する (⑪～⑳時間目)

- (1) 個人の学びから協働的な学びへと接合を図る。そのために、探究しているSDGsのターゲットが違う者同士の3～4人グループを構成する。
- (2) それぞれの学びや視点を活かしつつ、さらにグループで探究活動を行う。この際、学年教員が4人いるため、生徒のグループも4分割し、活動を行っていく。
- (3) 4分割したグループ内、そして学年でプレゼンテーションを行う。
- (4) 1年間のまとめをし、7年生への学びとつなげる。

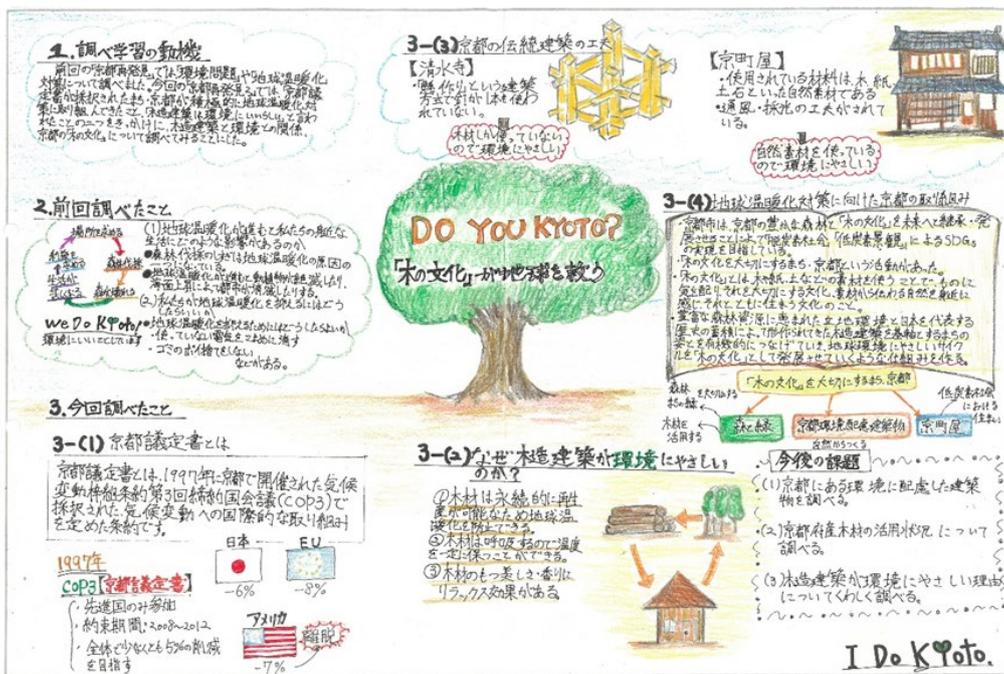


図2 夏季休業を利用した、自分事として考えた京都の魅力と課題の実践

## 5. 今後の展開（成果活用の視点、残された課題への対応、実践研究の可能性や発展性など）

世界を取り巻く諸問題に対して、生徒が主体的に知識を得ようとし、さらに深めていくために「問い」と「対話」を繰り返しながら活動していきたい。また、広く世界につながる課題を自分たちが住む「京都」と重ね合わせ、「6年生の私たちにできること」を考えていくという単元の流れの中で、これからの社会に必要な、未知なる問いを解決しようとする力を育みたいと考える。

さらに、国語科や社会科と意図的に絡め合わせながら単元を構成することで、教科横断的なカリキュラムの構築も模索したい。2022年度における生徒たちの学びの中には、各教科で身に付けた力を意識しながら活用していく姿を見て取ることができている場面もあった。

今後、With コロナ、After コロナを見据え、教室内で完結する学びに収束してしまうのではなく、外に開いた学びを展開していくことで、より生徒たちの学びを深めていきたいと考える。

## 6. 成果の公表や発信に関する取組み

※ 研究会等での発表や、メディアなどに掲載・放送された場合もご記載ください

○令和4年度 京都教育大学附属京都小中学校教育実践研究協議会「義務教育9年間で資質・能力を育成するための教育課程の再構築に関する研究開発」～縦（各学年）と横（各教科・各領域）のつながりを意識したカリキュラム構築～文部科学省研究開発学校（4年次・最終年次）における公開研究会発表

○「京都再発見2～SDGsに関連して～」をテーマにした31グループの発表をDVD化

## 7. 所感



図3 自分事としてのSDGsを踏まえた探究プロセスのイメージ

5年時の学習「京都再発見」の学びを礎にして、私たちの住むまち「京都」をSDGsの視点から再度見つめ直す機会になった。そして、書籍やインターネット上にある情報は参考にしつつも、「自分事」として、「実体験」を通して考えようを合い言葉として、1年間取り組んだ（図3）。

最終まとめでは、各グループが追究した課題ごとに現状の課題を克服するための手段を考えることができ、たとえば、SDGsを意識させるカードゲームや紙芝居を創作したり、廃材を利用しコースター等を作成し、他学年に配布したりするなど、啓発活動にも取り組めたことは大きな成果だったと言える。